

編集後記

『臨床教育人間学』第16号が発刊されました。編集補佐の役を任せていただき、貴重な経験を与えてくださった編集責任者の齋藤直子先生に、心より感謝申し上げます。

今号のページをめくりますと、構成的にも、内容的にも従来のとはずいぶん異なるものだと感じました。「統合学」の問題群も、「超学際的対話」も、漠然と思想研究をしてきた一院生としての私にとってはまだ聴き慣れていない言葉でした。しかし、このことは、臨床教育学は決まったディシプリンがあるわけではなく、常に新しい解釈と実践の可能性に開かれていることを表しているとも思います。

先生が「巻頭言」にて書かれた通り、臨床教育学コースは過渡期を迎え、伝統に向き合い、発展を模索するように促されている状況にあります。「臨床教育学」の意味が問われ、不明確になることはこのコースのメンバーにとっては危機的でありながら、一人一人の研究を振り返る機会でもあります。数多くの院生たちは、「そもそも臨床教育学とは何か」、「臨床」という言葉が付いているのに思想研究だけをしていいのか」などの問題を問いつつ、この状況を自分自身の課題として引き受けました。そして、これらの問いに対する自分なりの答えを授業、研究指導、自主ゼミそして日常会話の中で共有し、しばしば議論を盛り上げました。個々のパースペクティブから「臨床教育学とは…」を発言し、自分自身の研究においてそれを表現していくことは、まさにニーチェが言うように「生成に存在の性格を刻印する—これが最高の力への意志である」と思います。この意味において、生成し続ける「臨床教育学」という学問の意味を私たちに語らせることもまた、この年報の重要な役割だと思います。ただし、その意味が決して一つの同一性に固着することはあり得ません。「臨床教育学とは何か」が問い続けられる限り、その答えも与え続けられるのでしょう。次号から、「臨床教育学」にどんな新たな意味が付与されるか、どうぞご期待ください。

最後になりましたが、今号の編集作業を協力してくださった院生の皆様、多大なるお力添えをいただいた前号編集補佐である山本源大さんに、心から御礼申し上げます。

2022年6月21日
京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学コース
編集補佐 博士後期課程 XING SHUYU